

「ドラムサークルの可能性を探る」

1733036 寺岡 淳広 猶原和子ゼミ

要旨

本論文の目的は、ドラムサークルの歴史や変遷を調べ、ドラムサークルをどのように活用することが望ましいか、その中で特にファシリテーターの役割はどうあるべきかを提言することである。

ドラムサークルとは、世界の打楽器を用いて輪になり即興演奏を楽しむ活動であり、その特徴は、年齢や音楽経験に関係なく誰でも参加可能であることと、間違いや失敗はなく自由に演奏することが出来ることにある。現在ドラムサークルと呼ばれている種類は大きく3種類で、よく用いられているのは、アーサー・ハルの提唱した「ファシリテーター・ドラムサークル」である。日本ではYAMAHAやREMO社が後押しした2000年から始まり、学校や施設、地域に活動が広がっている。サークルの意義として、脳科学や教育的視点からは、ストレスを緩和し元気になることや、即興などの音楽表現力および他者意識やコミュニケーション力が向上することが明らかになった。

次に、文献や映像をもとに小学校と幼稚園での4つの事例を分析した。子どもと保護者の感想や映像からは、他者への興味や関心が深まり、一緒に演奏する楽しさや楽器の叩き方による音の違い、一人ひとりの表現力の違いに気づくなど、多くの効果や子ども達の成長の可能性を秘めていることがわかった。また、映像からは、何よりも参加者と一緒にファシリテーター自身も楽しむことが大切であることを感じた。実践者の振り返りからは、参加者全員が楽しむための環境設定やファシリテーターの重要性が明らかになった。

そこで、実際にファシリテーターとして活躍している2人にインタビューを行った。柏市在住のA氏は、ドラムサークルの楽しさに惹かれ、定年退職後柏市がヤマハと協力して「音楽で地域のまちづくり」を目指して設立したファシリテーター育成教室に参加し、第1期卒業生として、地域で活躍されている。多くの楽器を市が貸し出し、地域の人々の運営によって、孤立化しがちな都会の人々がともに地域に生きる人として、ドラムサークルによるつながりが生まれつつあることがわかった。

また、B氏は音楽家で音楽療法士であり、アメリカでアーサー・ハルに学び、REMO社の会長とも親しく、飛騨高山市でドラムサークルを含め幅広い音楽活動をされている。彼女はジャワ大地震後、6つの学校を回りドラムサークルを行う中で、子どもに笑顔が戻り、「言葉のいらぬコミュニケーションツール」と実感したことや、「日本のファシリテーターはパフォーマンスしすぎだと思う」と話された。

「教えずして教えること」とアーサー・ハルはいう。ファシリテーターには参加者が自由に楽しみながら一つの音へ促したり、参加者の様子を常に把握し、知らず知らずのうちに打楽器を叩くことへ夢中になるように導いたりすることが求められる。

柏市のサークルへの参加は、コロナ過でかなわなかったが、今後、自分も周りの人が楽しい気

持ちでつながることができるように、もっと学んでいこうと考えている。